

「かわりゆく人々」から「自立する先住民」へ
ーアラスカ・チムシアンとダンカン・ソサエティ・モデルー
岡庭義行
(帯広大谷短期大学)

ダンカン・ソサエティ・モデルとは、19世紀末にアラスカ・チムシアンを布教に訪れたキリスト教の宣教師が、彼らに導入した社会生活モデルである。我が国では、岡正雄らによって1960年代に行われたアラスカ調査の報告書の中で紹介されているが、その記述は僅か28行の短いものであり、彼らの開発と文化をめぐる本格的な調査は2000年代に岡田淳子らによってなされるまで、およそ四十年の歳月を要することとなった。そして、この間に彼らの社会生活は大きな変化を遂げてきた。

1960年代の調査では、アラスカ先住民の「伝統文化」を記録することを目的としていたために、ダンカン・ソサエティ・モデルによって社会生活が営まれている彼らを「例外的」と捉えている。しかしながら、今や北西海岸先住民社会を概観するとき、彼らの社会を「例外」として考えるには修正を必要とする状況がそこには存在している。

本報告は、我が国におけるアラスカ・チムシアンに関する上記2つの報告記述を比較しながら、変貌を遂げながらも維持されて続けているダンカン・ソサエティ・モデルに関して解説するものである。